

## 2022年度 公立大学法人北九州市立大学特別研究推進費 実績報告書

2023年 4月 13日

北九州市立大学長 様

(所属・職名) 外国語学部英米学科 准教授  
(氏名) 雪丸 尚美

公立大学法人北九州市立大学特別研究推進費に係る研究実績について、次の通り報告します。

研究課題名	多様性と包摂 (Diversity and Inclusion) のワークブック制作					
	合計	使用内訳 (単位: 円)				
交付決定額	587,520	備品費	消耗品費	報酬	その他	旅費交通費
執行額	575,931	0	139,224	256,010	152,697	28,000
執行残額	11,589					
共同研究者	所属・職名	氏名		役割分担等		
	外国語学部教授	フィオナ・クリーサー		研究の計画・実施、結果の分析、研究成果の発表		

研究分野: 教育、ジェンダー

キーワード: 多様性と包摂、教育、ジェンダー、障害、LGBT+の権利、人種と民族

### 研究成果の概要

本研究の目的は、学生と教員が協働して、多様性と包摂をテーマとしたプログラム専用のワークブックを制作し、2022年度2学期開講の「特定課題演習 B (ダイバーシティ)」において活用することにより、ワークブック及びプログラムを改善することであった。

本研究の成果として、ワークブック英語版(初版)と日本語版(初版)を制作した。また、2022年12月に開催されたAPカンファレンス2022で発表したほか、2023年7月に開催される国際学会IGALA12にて発表する。さらに、「特定課題演習 B (ダイバーシティ)」のほか学部・大学院の担当科目、i-Design コミュニティカレッジの担当科目、本学の公開講座「キッズ 2Kids」などにおいて本研究で得られた成果を紹介し、学生や地域の

子ども達に多様性と包摂に関する正しい知識が普及するよう努めた。

### 研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果を国際学会で発表することにより、多様性と包摂に関する教育について大学で可能な実践を近似領域の研究者と共有することができた。また、研究により得られた知識やスキルをジェンダー論や英語科教員養成に関係する学部の授業のほか、大学院や i-Design コミュニティカレッジの授業、また本学の公開講座「キッズ 2Kids」等で共有することで、学内外で多様性とジェンダーに関する正しい知識が普及するよう努めた。

### 1. 研究の背景

世界各国が持続可能で多様性と包摂性のある社会の実現を目指している中で、我が国の大学教育においても、学生が多様性と包摂に対する理解を深めたり、差異に対して否定的に感じたり拒絶反応をしたりしない態度を涵養することは必要不可欠である。また、近年、学習者の多様なニーズに配慮したユニバーサルデザインに立脚した教育の必要性が唱えられている（伊藤、2015）。今後の大学教育課程において、多様性と包摂に対する理解を高めると同時に、多様な学生のニーズに配慮した教育を実践することは喫緊の課題といえる。

そこで申請者らは、2020 年度から 2021 年度の 2 年間、学長選考型研究費 A「Unity in Diversity: Inspiring the Future Generations」において、多様性と包摂をテーマとした日英両言語併用の大学生向けプログラムを構築し、専用ワークブック及び教授用資料を作成する研究プロジェクトに取り組んだ。構築したプログラムは、2021 年度 2 学期より外国語学部開講の「特定課題演習 B」として実践している。また、学会発表や論文及び学術書の一部において、同プログラムの成果を発表している。しかし、新型コロナウイルス感染拡大の影響で研究が滞ったことから、ワークブックは英語版のサンプル版の制作にとどまった。

### 2. 研究の目的

上記の背景より、本研究は、2021 年度に「特定課題演習 B」を受講した学生と申請者らが協働しワークブック（英語版・日本語の初版）を完成させ実際に授業で使用することで、ワークブック及びプログラムを改善することを目的とした。

### 3. 研究の方法

本研究プロジェクトは、ワークブックの作成と活用及びフィードバックに関して二つの段階から構成した。第 1 段階では、教員と学生の協働による学びを取り入れて、英語版と日本語版のワークブック初版を作成することである。具体的には、2021 年度に「特定課題演習 B」を受講した学生と協議し、ワークブックに学生の視点を取り入れた。その際、学生と女性個人事業主（書籍やウェブのデザイナー）を繋ぐ架け橋として、彼女の持つ知識や

人生経験を共有し学びあう機会を提供する。さらに、研究協力者の学生に対し、ワークブックの内容に沿ったテーマでインタビューを行い、その回答をコラム（学生の声）としてワークブックに掲載する計画であった。

第2段階では、2022年度2学期開講の「特定課題演習B」でワークブックを教材として使用し、ワークブックのさらなる改善を試みる計画であった。また、申請時の計画では、英語科の教職課程を履修する学生をTAとして雇用し、英語でアクティブラーニング型の授業を行う側としての経験を積ませることとした。

#### 4. 研究成果

研究計画に従い、以下の通り研究を実施した。

##### ○ 英語版と日本語版ワークブックの制作

学生や外部講師と協働して、2021年度に作成したサンプル版の英語版ワークブックの内容を精査した。この作業のために、2021年度2学期の「特定課題演習B（ダイバーシティ）」を受講した学生から協力者を募集し、女性個人事業主（書籍やウェブのデザイナー）から専門知識の提供を受けながら、内容について協議した。当該サンプル版を改善して、今回の英語版と日本語版の初版を制作した。

日本語版ワークブックの制作については、英語版と内容は同一である。学生協力者の協力を仰ぎ、英語版ワークブックの日本語への翻訳作業を行った。英語版の初版は2022年9月、日本語版ワークブックの初版は2023年3月に出版した。

また、2021年度2学期の「特定課題演習B（ダイバーシティ）」を受講した4人の学生に対し、（1）女性のエンパワメント、（2）LGBTQ、（3）人権と市民権、（4）性教育の四つのテーマで半構造化インタビューを行った。このインタビューから得た結果を、コラム（学生の声）としてワークブックに掲載した。

##### ○ ワークブックの活用と改善

「特定課題演習B（ダイバーシティ）」にて英語版ワークブック（初版）を使用し、15回の授業後に、授業全体の改善を目的とした授業評価の範囲内で、受講者からのフィードバックを得た。ワークブックに関しては、「あまり興味がなかった題材であっても、情報へのアクセスが簡単なことによって、視野の拡大の大きな助けになる。参考文献のアクセスが簡単なこともそうだが、学生が自発的に知識を得るサポートが非常に強力だと思う」「今まで聞かれたり考えたりしたことのない質問が多く、自分を見つめる良い機会になった」「記入する欄が広くて、絵や文を書きながら作業できたので、自分の考えやグループでの考えをまとめやすかった」「全体的に色がやさしく、文字が読みやすかった」など肯定的な意見が見られた。

改善すべき点としては、申請者らがワークブックを使用する中で、より授業の流れが良くなると思われる項目の設定や誤字脱字の修正である。これらの点は第2版制作の際に

改善する。また、日本語版ワークブックは今年度 2 学期での活用ができなかったため、来年度の同科目において使用し、内容を精査する予定である。

#### ○特別講義の実施

ワークブックの内容の一部である女性活躍に精通する北九州市女性活躍推進課の西嶋真氏を招き、女性活躍・ワークライフバランスについてお話しいただいた。この特別講義は「特定課題演習 B (ダイバーシティ)」の受講生以外にも呼びかけ参加を募った。参加した学生からは、「北九州市や全国の企業での女性活躍の試みについて知る良い機会となった」「ワークライフバランスについて、自分のこととして考える機会になった」「今後の就職活動で考えるポイントを知ることができた」などの感想を得た。

#### ○「特定課題演習 B (ダイバーシティ)」における TA の活用

研究代表者と研究分担者で検討を重ねた結果、ワークブックが多様かつセンシティブな内容を扱うため、本科目の TA に必要なスキルや知識について更なる準備が必要であることが明らかになった。そのため、今年度は TA の活用は行わず、検討を続けることとした。現在、立命館アジア太平洋大学でダイバーシティ TA という先進的な取り組みを行っている Peter. W. Roux 准教授と協議を行っている。

#### ○研究成果の公表

2022 年 12 月に立命館アジア太平洋大学で開催された国際学会アジアパシフィック (AP) カンファレンスで発表したほか、2023 年 7 月にクインズランド大学で開催される国際学会 IGALA12 にて発表する。IGALA12 で発表した内容を論文にまとめ、IGALA のジャーナル『Gender and Language』またはダイバーシティ研究の国際ジャーナルに投稿する予定である。また、本学の授業や公開講座において本研究で得られた知識やスキルを共有し、多様性と包摂に関する最新の知識が普及するよう努めた。

2023 年度以降はこの成果をもとに科研費基盤研究 (C)「大学の教員養成課程に在籍する学生の多様性と包摂に関する理解の促進」(代表：クリーサー、分担：雪丸)において研究を継続する。